



兎の話

佐藤禮介

今年は卯歳であるから兎の話と致す様にとの御注文が有りました。兎は卯歳の由來について何れも知りませぬから、兎兎といふ動物について少しくお話を致しました。まづ。

其の形。……兎に兎といへば耳の長いこと、跳ぶことの上手なこと、は誰も直に思ひ出す點であるが、猶此の外、兎の特有の形を二つ三つ申さしやう上唇は真中から縦に裂けて居り、前歯は上顎

に四本、下顎に二本あつて絶えずだん／＼成長する。其れ故堅い木の皮などを噛んで齒の先が磨滅すればだん／＼成長して之を補ふことが出来る、奥齒即ち臼齒は前齒の様に成長せぬ、而して奥齒の上面には凸凹の線があつて硬白の面の様になつて居るから、食物を噛み砕くには甚だ便利である。尾は短く多毛である、後脚は甚だ長く且つ強大であつて各五本の趾があり、前脚はやゝ短くて只四本の趾を有して居る。

野兎と熟兎。……兎には種々なる種類あるが世人のよく知るのは野兎(ノウサギ)と熟兎(ナンキンウサギ一名カヒツサギ)とである、野兎と熟兎とは元より別種である。

野兎は耳甚だ長く、後脚至つて長く、兎は生るゝ時既に眼を開き俤には毛が厚く生じて居る。

する。

兎の敵。……兎は甚だ弱い獣であるから強い敵に抵抗する武器を持たぬ、實に野兎の様に多くの敵を四方に有して居るものは多くの獸類中恐くは無いであらう。人の設けた蹄係、犬を伴つた獵夫を始めとして晝間は狐、鷲、鷹などが襲ひ來り、夜間にはよくろう、みづくの類が攻撃する。一寸でも油断すれば直に敵に殺されるゝゆゑ、性質極めて臆病である、風聲鶴唳にも耳を聳てるといふのは、兎の臆病を形構するには最も適當の言葉であらう。

避難の術。……敵に襲はるゝも之を防ぐの角もなく、之に噛み付く牙もなく、之を貫く爪もなく、丁度身に寸鉄を帯びずして強敵に對するの術有様なれば、兎が自衛の策、避難の術として頼む

所のものは只二つである。即ち強敵の來るのを早く豫知すること、奔跳一番すれば恰も飛鳥の如く敵をして殆んど追究すること能はざらしむるのである。耳は長くして之を自由に動かすことが出来るから、何れの方角から敵が襲うて來るかを、豫知することが出来る、聽神經がよく發達して居るから、遠隔の地より來る微細な音響をも聞き分けることが出来る、四本の脚はいづれも強壯に出來てあるが、殊に後脚には強力なる筋肉があつて非常なる跳躍をなすことが出来る、其の跳び方の巧みなることは雪面に残せる足跡の圖を見ても之を證することが出来る、即ち二つづゝの前後脚は恰も互に結合したるが如く同様に働き、後脚は前脚よりも前に進み雪を蹴で一跳一躍するのである

詭計。……兎は只逃げる事が巧みばかりでな

く、其の逃げ方が中や上手である、決して只目的なしに走るものでない、獵犬に追はれて逃げるときは、大抵風の方向は徒らなものである、東風の時は西に向て逃げ、北風吹く時は南方に逃げるのである、是れ追はれつゝある犬の足響を正しく聞き取る便あるのと、自分の体の臭を犬に嗅知せしめぬ益が有る爲である。又逃げるに當つても屢進路の方向を變へ、右往左往に屈行する是れ追手をして道を誤らしめ、且つ搜索の爲に多の時間を空費せしむるの利あるからである。或は一個所にウロウロ徘徊した後突然他方に跳躍することがある、是れ獵犬をして自己の体臭の踪跡を失ひ誤らしめんが爲である。

○○○○ 兎狩り。……兎を狩り捕る仕方は様々ある或は獵犬をして兎を追ひ出さしめ、獵夫之を銃殺する

法もある、或は二三人の獵夫をして兎を追ひ出さしめ、飼ひ馴らしたる鷹をして之を攫み捕らしむる法もある、是は狩獵の方法の内最も興味ある方法である、現今でも羽後國横手町附近では鷹を使つて兎狩をなすつゝある。多人數で兎狩りを爲すには網を用ひるのである、網は糸繩で大目に作り百間若くは二百間も長く一直線に張りつめ、其の網の一方より遠廻しに半圓形に取り圍み、周圍より多人數一度に喧囂なる響を爲し兎を驚かして網に突進せしむるのである。

○○○○ 處附の兎と漂き兎。……野兎は一定の隠れ場所を求めて一地方にのみ棲息するものがある、かゝる處附きの兎を追跡するときは、其の隠れ場所より遠く隔れた所に逃げ去ることなく、其の棲所を中心として環狀に逃げ廻するものである。之に反

して追ひたる兎が只一直線に逃げ去るときは、是れ漂き兎であつて多くは牡兎である。牝兎は大抵一月より三月頃までは兎を産むものであるが、此の時には牝兎は兎を育て、膚附となり、牡兎は漂泊性となり、諸方に流浪して所謂漂き兎となるのである。

○養殖。……野兎の兎を産むのは一年に三回、若くは四回であつて一町二三頭、若くは五頭つゝ生むものである。

野兎は巢を作らず、兎を地上に置いて養ふ、多くは灌木の藪の中に小丘の麓の凹處などに居る母兎は凡二十日間其の兎を哺乳せしめ、其の後全く獨立して食物を求むる様になれば兎兎等四方に散亂する野兎は通常八歳乃至十歳位の壽命を有して居るものである。

○夏衣と冬衣。……兎は多の敵を有する獸であるから毛色が成るべく外圍の物の色に似て居ることが必要である、それであれば餘程敵に發見せらるゝことが少い譯である。故に野兎は夏には茶色の毛皮を有して森林の、樹下に隠れて其の下に落ちてある枯葉の色に模擬して居る、又我が國の東北地方などに居る野兎は冬になると毛色が純白となつて雪の上に動かずに居れば何處に兎が居るか分らぬ位である、是れ又自分の強敵に發見せられぬ爲の色である、實に兎の夏着の茶色であつて冬着の白色なのは動物自衛の色の好適例である。

○視力弱し。……野兎は聴覺が極めて發達したるに拘はらず視力は頗る鈍い、是れは眼力の弱さにも因ることであらふが、一は眼の位置が頭の兩方にありて前方を直視することの出來ぬにも因ること

とであらふ故に獵夫は兎の所在を見出したならば兎の正面から且つ成るべく風下から進めば随分近寄ることが出来るといふことである。

人に馴る。……野兎は性臆病であるけれども教ふれば能く人に馴るゝ様になる、ドクトル フランクリン氏は兎を馴して冬期暖爐の前に、猫及び犬と一處に居らしめ互に嬉戯する様に習慣づけたといふことである、又佛蘭西では野兎を馴して太鼓を打ち舞蹈をなし、拳銃を發火するなどの藝を教へたといふことである。

人類に與ふる利と害。……野兎は山野に居りて幼樹の樹皮や若芽を噛み食するゆゑ、山林の計營をなす上から云へば稍害をなすものといはねばならぬ。併し之を獵獲すれば其の淡泊なる肉を味ふことを得るのみならず、毛皮は帽子又は手袋に造

ることが出来る。

熟兎。……ナンキンウサギ即ちカヒウサギは元來野生のものであつて、亞非利加の原産であるが今は多く人家に飼はれて居る、我が國に飼育するものは外國から輸入した熟兎の種類である。我が國にも熟兎を飼ふことは明治の初年より始まり、その後一時大に流行したことがあつたが、是れ投機者に促されたるものに過ぎなかつたので、幾ばくもなく衰微した、然るに明治二十年頃から再び之を飼育するもの多くなつて來た。

熟兎の効用。……熟兎には食用を主とする種類あり、愛畜を主として飼はるゝ種類あり、其の肉味はやゝ鶏肉に似て淡泊であるが、田舎の肉食として最適のものである、毛は編物又は毛織物に用ひられ、其の革は手袋襟巻等に造るに宜し、其の

飼料も夏時は山野の雑草を與へ、其の他の時季には野菜の殘片 人の食用に供し得ざる廢物を與ふれば宜しいゆゑ、小農家の副産物として頗る有利なる家畜である。

(完)

君が代に

千代萬代と數ふるも

年の始の

あればなりけり

中山忠能

史傳



エドワード、デロング

米

溪

氏より育ち、とは下世話に克く用ふる所、千古の確言、動かすべからず。而も、育つるには、最も幼時に心を用ふるを要す、稚きものの頭は枕の當て様によりても、其の形、變するものと聞けるか、實に染み易さ白糸の、一滴の汚も、終生拭ふべからざる痕を止むべきものなるに、紅顔の印象は、聽て、白髪 of 述懐となるものなれば其の育て方こそ、又心せざるべからざるものなるを我が國、從來の様を思へば、之は、誰